

Title	高島善哉 水田洋 平田清明著 社会思想史概論
Sub Title	
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.10 (1962. 10) ,p.957(99)- 958(100)
JaLC DOI	10.14991/001.19621001-0100
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19621001-0100">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19621001-0100</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自然法思想のおもな担い手は独立小生産者で、彼らはロックと思想的にも社会的にも共通な基盤をもち、ロック主義者といわれる。だがそれは、思想的にも社会的にも解体しつつあるもので、自然状態の仮設や自然権の把握、市民社会の把握において、ロックとは一定の差異をもち、ロックの自然法を、市民社会における自己保存―自然権の主張として、解体したかたちで継承した(二二頁)。そこで小市民的急進主義II ロック主義II 自然権思想(七九頁)となり、プライスがその典型として示される。だがここでも、著者がそのロック像を省略しているのが、登場人物のロックに向ける視線について若干の疑問が生ずるのである。先ずロックの社会的基盤については議論の多い所で、没落過程の小生産者思想的にも社会的にも共通だというだけでは不明な点が多い。またロックには、著者もいうように「プライスの拒否する『功利の原理』がある」(九九頁)ので、「ベンサム主義の真の祖」(ラスキ)とさえいわれる。ロック主義を自然法(または権)だけに限定すると、たとえば功利主義を奉じ、「小生産者の性格をほとんどまったくもってはいなかった」(一五三頁) プリーストリをもって、「小市民的急進主義の主流」(二七七頁)に数えるのは妙な感じもするし、小市民的急進主義に属しながら功利主義を受容したゴドウィンやトムスンについては、「産業革命が、独立小生産者を、かれらの願望にもかかわらずおしつぶしたとき、自然権の主張もまた、消滅にちかおしつぶされた」(二二頁)というだけでは不十分であろう。問題は、小市民的急進主義の内部において、自然権思想がどのような役割を果たし(最後の重要な例はホジス

キン)、どのようなかたちでベンサム主義を受容せねばならなかったかということのように思われる。そこで、功利主義化の帰結を哲學的急進主義にたどるだけでなく、ペイン、ゴドウィン、さらにはブレイスその他群小思想家の運動の中にそれを探ることが、本書の課題となるのではないだろうか。空想的社会主義の成立も、それを運動として見た場合、このような人々との関連の分析がおそらく不可欠であろう。

終りに、急進主義を理解するのに欠かせない鍵として、諸外国の革命運動と宗教を挙げたい。この書もちろんアメリカとフランスの革命の影響について触れているが、諸外国の急進主義者について説くところが少いのでイギリスの独自性が不明だし、その関連で重要な事柄が省略されているのが残念である。宗教については、清教徒の一部が急進主義を形成して以来議会改革運動の中核は非国民的自由に拡張し、議会改革を進めた。(Cf. R.G. Cowherd: The Politics of English Dissent, 1959, p. 8) プライスやプリーストリが率いたユニテリアン派はいかに及ばず、ゴドウィンなどの牧師出身者を含めれば急進思想家の多くは非国教徒で、Revolution Societyその他多くの団体をつくり、たとえばフォックスなどもこれとの連繫を策すほど大きな力をもっていた。名譽革命体制の経済的側面及び統治機構に対する彼らの態度には、その宗教的信条が大きく影響していると思うのだが、誤りであろうか。

(お茶の水書房・A5・二八四頁・八〇〇円)

### 新刊紹介

小島 清著

#### 『世界経済と日本貿易』

第二次大戦終了直後は世界経済自体が攪乱されていたばかりでなく、国際経済学もまた整備された状態になかった。戦後十七年たった今日、世界各国も戦後復興期から経済発展の段階に入り、学界もまた、何が世界経済の一次的攪乱であり、何が構造的変化であったかを識別できる段階に達した。戦後あれほど議論されたドル不足問題は先進工業国間ではもはや解消したように思われ、世界経済の問題として、西欧共同市場、国際通貨制度、後進国経済開発と援助、東西貿易などの諸問題が浮び上ってきた。このような問題はバラバラに生じたのではなく、世界経済の新しい体制への転換に連なる一連の問題である。小島教授は世界経済の大きな流れを把握しようとする態度を示され、すでに「世界経済と技術」(一九四三年、商工行政社)、「赤松要教授と共著」、『国際経済論』(一九五〇年、新紀元社)を著わされた。いまこれに続く第三集として本書を世に問われたわけである。

### 新刊紹介

本書の狙いは、戦後世界経済の基本問題を一九世紀初頭以来の世界経済の長い歴史的發展の動向のなかに位置づけ、理論的背景の筋を通して解明し、世界経済の将来を展望することと、世界経済環境の省察から日本経済と日本貿易の進路についての指針を明示することにある。内容は三篇にわかれ、第一篇では一八〇〇年頃からの世界経済の生成と発展と比較して、戦後の世界経済の構造変動を素描し、E.E.C等にあらわれた共同市場的運動の必然性と論理を究明、第二篇では、ドル不足問題を反省し、ドル不足解消に伴ってあらわれた国際通貨の問題が、トリフィン案の検討を通して取り扱われ、後進国援助問題の在り方におよぶ。第三篇では世界経済の動向に対応する日本貿易の発展と構造変動を輸出・輸入両面から跡づけ、将来への進路を追求されている。

本書はすでに発表された諸論文をもとにしてまとめられているので、小島教授の論文を従来から追ってきた者にとっては、すでにおなじみの論理が展開されている。国際経済学者として比較優位にもとづく国際分業の理論が基本となり、そのうえに合意的分業にもとづく新しい理論などが教授独特の豊かな、雄大な構想と、綿密な作業により、比較的長期の世界経済を対象としながら、そのなかにみ

ごとに生かされていることを読者は認めるであろう。(勁草書房・A5・四三七頁・一四〇〇円)

高島善哉

水田 洋著

平田清明

#### 『社会思想史概論』

社会思想史という表題によってかかれた文献は、内外ともきわめて多数にのぼっている。それらはともに、ことなつた視角と方法をもち、多様な課題をもっている。この本は社会思想史概論という表題だけをみると、そのような多種多様な方法と課題をもつ社会思想史学に対して、ある最終的な結着をつけ、いままでの研究成果に一つの通説をつくりあげようという意図のもとにかかれたものと思われがちであるが、それは必ずしも当らない。この本が概論の名にふさわしい広汎な内容をふくんでいるとしても、それが、この本の意図ではないのである。

この本は社会思想を、社会における人間のあり方についての思想、生き方の問題(三四四頁)として一貫してとらえ、諸社会科学の成果を、そのように明確な、鋭い問題意識に立って、もう一度構成しなおそうという積極

的な意図のもとにかけられている。だからこの本は、権威をうちたてるためではなく、「社会における人間のあり方」について読者をいや応なく、自分自身で考えさせるべく、かけられた、といつてもいいだろう。

その特徴的なあらわれの一つは著者たちが近代社会の基本構造を把握するために、体制、民族、階級の三つのカテゴリーをとり上げ(二〇頁)、それぞれに対応して社会思想史を三つの解放に区分して考察していることである。第一部は人間の解放、第二部は民族の解放、第三部は階級の解放である。(体制と人間がどう関連するのかが明らかでない。なお、その他に、体制、段階、状況の三つのカテゴリーがあげられ(三五八頁)ている。)もちろんこれらは無関係のものではなく、歴史的段階、国によってそれぞれからみあったものである。そして現代に生きるものは、これら三つのカテゴリーのもつ歴史的意味を、主体的に体得しなければならぬことを説かれるだろう。人間、民族、階級、たしかにこれら三つのカテゴリーは、歴史がわれわれにのこし、また、現実が日々われわれの眼前にその解決を迫っている問題であることは疑いえない。読者はそれについて考えざるをえないだろう。だが、これら三つのカテゴリーを社会思想史の基本的なカテゴリーとしてえらび出す

こと自体には問題があると思われる。それについて論ずるのは紹介の域をこえるが、むしろ、それに関する成果ある論争こそ、この共同著作の期待するところであろうことをつけ加えたい。また本書は、時に応じて利用すべき本としても、巻末の参考文献とともに、社会思想史を学ぶ意志のあるものにすめたい。(岩波書店・A5・三八七頁・六五〇円)

野地 洋行

田口憲一著

『大企業は暗躍する』

大企業は「現代のリヴィアサン」である。われわれの生活は、直接間接に、大企業の網のなかに組みこまれており、その支配のもとにおかれている。生産力の強力な担い手として、大企業は、「正直爺さん」をよそおい、われわれのまえにその素顔を現わさない。

本書では現代の大企業もつ「五つの顔」が扱われている。プロローグ(五つの事件の企業史的背景)、エピローグ(五つの事件の意味と性格)を前後にして、独占(史上最大の反トラスト裁判)、乗取り(買占めをめぐる米英二社の死闘)、談合入札(大電機メーカーのなれあい)、特別背任(会社首脳部の計画的汚

職)、詐欺(今世紀最大の株式詐欺事件)、の五ヶースが、オムニバス形式のノン・フィクション経済読物として書かれている。

アメリカの石油・アルミ・電機・自動車・証券における各事件史が「大企業の暗躍」としてとらえられ、扱われる問題領域は広い裾野をもっている。独占と競争、独占価格設定、ブライス・リーダーシップ、コリュージョン、資本集中戦術、秘密カルテル、企業組織と個人、「ホワイト・カラーの犯罪」、大企業の官僚制と非情、擬制資本と射撃心、詐欺、等々、総じて、アメリカの誇る自由企業体制の日蔭にあるいは日向に生まれた諸現象が、「暗躍」のなかに含まれている。それらを通じて、われわれは、非情な資本が人間に強い異常な行為をなまなましく知らされる。そして、公的・私的「犯罪」と背なかあわせの現代人、つまり、われわれ自身をそこに見出すのである。

現代資本主義の「繁栄」の反面に資本主義の腐朽化の深化がある。ここに描かれた大企業の素顔は、いわゆる産業もの、経済ものとして、興味本位の読物に終ってはならない。また、アメリカという彼岸の出来事として片づけられてはならない。現代独占資本主義の経済法則を究明する過程で、そこに必然的に生成する、資本家、経営者、ホワイト・カラ

1. 寄生インテリ等のいわば「限界状態」における思想と行動の非人間性を、われわれは仮借なく告発しなければならぬ。その意味で本書はポピュラーな形での重大な問題提起の書である。ただ「理論的総括」をめざした前・後の解説は、それなりに示唆にとむものではあるが、いわば作家と評論家の混在となり、かえって論告の鋭さを減じているうらみがある。(新潮社、ポケット・ライブラリ、一九六二年六月刊、二九〇頁、二二〇円)

佐藤 芳雄

向坂逸郎著 『マルクス伝』

(『マルクス・エンゲルス選集』13)

わが国にマルクス主義が導入されて以来、マルクス自身による『共産党宣言』、『資本論』をはじめとして、はたまた最近の『経済学・哲学手稿』等、幾多の著作が紹介されてきた。それと同時にマルクスの六〇余年にわたる生涯や、その間における彼の思想的発展などが明らかにされてきた。しかしながら、これらの企図は、マルクスの著作の未開発や、日本のマルクス主義がその半世紀以上の歴史のなかで直面した弾圧政策のために、十二分の成

果をあげたとはいえない。その間、諸外国では、とくにモスクワのマルクス・レーニン研究所などを中心に、マルクスのうずもれた諸資料の発掘がさかに行われ、マルクスの生涯・思想学説発展研究の分野では急速な進歩がみられるに至った。とくに今世紀に入ってから明らかになった「ドイツ・イデオロギ」、さきに掲げた『経済学・哲学手稿』を中心としたマルクスの初期(一八四〇年代)の抜萃帳などの発見は、マルクス主義に一層の確固たる基礎を提供することになった。また同時に、マルクス主義の生成史に論究欠くべからざる研究分野をつくりあげてきた。今日われわれが「初期マルクス研究」と呼んでいるものは、このようなマルクス主義の生成過程に現われてくる思想的諸問題を取りあげ後期「資本論」を中心とした時代との体系的発展過程を問題としているのである。従って、マルクスの生涯を描こうとするならば、そのこととはたんに通俗的方法による「伝記」の域を一步出た、思想的な発展と密着したところでの「伝記」を書くということになる。あるいは、「伝記」を「伝記」そのものとして読者に提示するのではなく、マルクス主義の体系的理解を可能にするような基礎を与えるものとして提示しなければならぬ。従来おこなわれてきたメーリング「カール・マルクス」そ

の生涯と歴史——、リヤザノフ『マルクス・エンゲルス伝』がマルクスの思想発展研究のうえでつねに問題にされてきたのは以上のような意図で「伝記」が書かれているためであらう。現在、徐々に刊行されている、A. Cornu, Karl Marx und Friedrich Engels, もまたその意図において同様であらう。他国に類をみない永い歴史と高い研究水準を有するわが国のマルクス主義も、いつかは独自の「マルクス伝」「エンゲルス伝」をもたなくてはならなかった。

本書はまさにかかる状況のうちに投げられた、わが国の本格的「マルクス伝」の最初の一石としての役割をになつたといつて過言ではなからう。向坂氏の今日までのマルクス経済学者としての多方面の活動をもってすれば、「マルクス伝」はなすべくしてなつたといえるかもしれない。とくに、近年の労働運動の中でかなり重要な位置にあって活動されていた氏が、マルクス伝を通して主張したいと考えていることが、明白に感じとれる。とくに第一章から第四章にかけてのマルクスの青年時代の描写のなかに読みとることができようであらう。そこでは、マルクスが革命家としての基礎を築き、思想的出発をした青年時代における彼の人間像を通して、理論と実践の統一を心がけ、たえず現実的なもののみに関